

モーラム芸¹⁾の伝承形態の変容

—1970年代以降の東北タイにみるモーラム事務所の運営と芸能者の選択を事例として—

The Change of Teaching Form of Molam Performing Art

—Molam offices and performers' choices in Northeastern Thailand since 1970—

平田 晶子

HIRATA Akiko

The purpose of the following paper is to examine the effects that the “commercialization” of molam performing arts has had on how molam teach, as well as on how it has changed the relationship between molam as teacher and his/her student. Through anthropological research in the field, it has been found that molam offices have expanded the networks which connect molam to their clients. This recent change has presented molam with a wider range of performance opportunities which would have previously been unavailable. It is posited that the use of these networks, in addition to other factors such as the introduction of written contracts, have made molam teachers more business oriented particularly when it comes to teaching methods.

The data in this paper was gathered from several offices and villages in which molam singers were active. The paper is made up of four parts. The definition of the term “commercialization” and the music industry’s trend in recent years are presented in the introduction. In part two, the establishment of several kinds of molam offices is reviewed. Part three considers how office management has affected molams’ teaching form. Part four examines the molam singer’s choice on management form and performance groups. Part five, the “Conclusion”, investigates the impact of “commercialization” on the teaching form of molam performing art.

1. はじめに

本稿の目的は、東北タイのモーラム事務所の運営と農村に住む職業的民謡歌手であるモーラム芸能集団に焦点を当て、モーラム個人の芸能活動の実践における選択と事務所への関与のあり方を検討し、芸能の「娯楽ビジネス化」がモーラム芸の伝承形態に何をもたらしたのか考察することである。

1980年代の急速な経済発展による市場の活性化は、東北タイに住む農民の暮らしのみならず、

農村社会に住むモーラム芸能者の生活様式にも影響を与え、一層の消費社会、情報社会化を推進することになった。これは都心部を中心に発展してきた音楽ビジネス産業世界にも影響しており、音楽会社、作詞家、アーティスト、歌手の間ではプロモーションCDやVCDを制作して販売する傾向が主流となっている。

こうした背景の中、サムットクップの「娯楽ビジネス事務所 (*samnak ngan turakit bangthueng*)」を継承して[Smutkhupt 2001:260]、本稿ではモーラム自身がモーラム事務所を芸能運

営の拠点としてモーラム芸を展開していく動向をモーラム芸能の「娯楽ビジネス化 (*pen turakit*)」と表現する²⁾。この娯楽ビジネス化は、しばしば現地の人々にも用いられる。その場合、従来のモーラム芸能のあり方に対して金儲けを第一の目的として芸能運営するあり方に対する批判的な意味合いが含まれる³⁾。

具体的に、本稿は 1970 年代以降、東北タイのコンケン県と隣県マハーサラカム県に設立されていったモーラム事務所と村のモーラム芸能集団に着目し、近代的 (*than samai*) な上演様式を取り入れたラム・スィン (*molam sing*、以下、芸能自体を指すときはラム・スィン、芸能者自身を指すときはモーラム・スィンと表す)⁴⁾を研究対象とする。第 1 に、東北タイの農村社会におけるモーラム事務所の設立、役割、種類について検討する。第 2 に、芸能の娯楽ビジネス化は、モーラム芸の伝承形態にどのような影響を与えたのか記述する。第 3 に、モーラム芸の娯楽ビジネス化が東北タイ農村に住むモーラム個人の生き方にどのような選択肢を与えているか分析する。

東北タイのモーラム芸に関する先行研究としては、ミラーに端を発する。彼は「消滅の危機」への危惧から、東北タイの村落社会でみられるオペラ劇形式モーラム芸能集団とラオの楽器であるケーン (ラオスの笙) に焦点を当て、人類学的研究と民族音楽学的研究の両方から分析した [Miller 1985]。ミラーによるモーラム研究以後、1980 年代から 1990 年代にかけてタイ人研究者によるモーラム芸研究が蓄積されていく [Chonphairot 1983 ; Janthon 1988 ; Phaengngn 1991 ; Sathanak 1993 ; Thammawat 1993, 1994, 1997 ; Maphet 2002 ; Worajinda 2005 など]。これらの

研究の特徴は、歌詞研究や個人史研究が中心であり、なかでも伝統的様式をもつモーラム芸を記述したものに留まる⁵⁾。そこで本稿では、伝統的なモーラム芸研究の蓄積を踏まえた上で、これまで余り注目されてこなかった近代的な様式を取り入れて上演され、モーラム芸の形態のなかでも娯楽ビジネス化と密接に関わるラム・スィン⁶⁾を研究対象とする。

ラム・スィン研究の蓄積は、上述の伝統的モーラム芸の研究に比べて極めて少ない。先行研究としては、サムットクップの論文があり [Smutkhupt 2001:259-296]、彼はラム・スィンを構成する重要な分析要素にモーラム事務所を取り上げ、事務所の業務内容、公演依頼の成立過程などを詳述した。しかし、部分的記述に留まり、東北タイ農村に生きるモーラムたちがモーラム芸の娯楽ビジネス化の局面にどのように向き合っているのか、また事務所と村落社会を往来する芸能者個人の選択や関与のあり方についての考察が加えられていない。

そこで本稿では、東北タイのモーラムたちが迎えた娯楽ビジネス化という観点から、東北タイ農村に生きるモーラムの芸能活動と事務所の運営における個人の選択および関与のあり方を通じて、伝承形態にみる変化について明らかにする。

2. 東北タイにおけるモーラム事務所

(1) 事務所の役割

今日のモーラム事務所は、東北タイ各県の比較的大きな都市や都心中心部のバスターミナル付近に設立されていった⁷⁾。事務所の屋根や入り口の玄関上部には、「モーラム事務所」、「優良モーラム

集合センター」などと書かれた看板が掲げられている。多くのモーラム事務所では、モーラムの写真が壁に貼られている⁸⁾。つまり、モーラム芸の公演を希望する依頼主 (*cao phap*) に対して、事務所は、依頼主の希望に合ったモーラムを紹介し、モーラムに対しては公演の仕事の紹介を行うという役割を持つ。

コンケン県国営ラジオ放送局放送部長C氏によると、モーラム事務所が設立される以前は、モーラムは村から村へと移動する旅人芸人であった。モーラムは、収穫期から農閑期にかけて旅に出て、到着した村で芸を披露して娯楽を提供する。その報酬として、村人から農作物、米、寝床場所を提供してもらう。翌朝、モーラムは次の村へと出発する。公演ができるかどうか分からないが、公演場所を確保するためにも村を発つしかない。村を発つ前に、近隣の村の住人たちから、いつ、どの村で法事や冠婚葬祭儀礼があるかという情報を事前に得ることは欠かせなかった。C氏によれば、このようなモーラムを指して「米乞いモーラム (*molam kho khaw*)」と呼んで皮肉る人たちがいたという。

一方、法事や冠婚葬祭儀礼の際に、催し物としてモーラム芸の公演を用意したい依頼主側も、モーラム芸人を探しだすことは容易なことではなかった。モーラム事務所は、このような村落社会で芸能活動を続けるモーラム芸能者たちの不便な状況を解決する手段として設立された。

(2) 事務所の運営形態とモーラム芸能者

モーラム事務所は、東北タイ各県の県庁所在地である市内バスターミナル付近にある。

本稿では東北タイにあるモーラム事務所7ヶ所を訪問し、聞き取り調査で調べた結果、次の3つのタイプに大別した。旧型モーラム事務所タイプ、モーラム事務所兼養成学校タイプ、新型芸能プロダクション系モーラム事務所タイプの3つである。その中で典型的な事務所の事例として4つの事務所(A事務所、N事務所、R事務所、P事務所)の運営形態を表-1にまとめた。

A事務所は、モーラムではない一般の人々が、依頼者とモーラム芸能者をつなぐブローカーとしての働きをもちながらモーラム事務所を運営するタイプである。

N事務所は、モーラム自身がモーラム事務所を運営しているため、A事務所と同様に、事務所の運営においては、経営における収益よりも、モーラム同士の交流や師弟関係における繋がりを重視している。

R事務所は、モーラム自身が一座の事務所を個人経営すると同時に、モーラム養成学校と音楽制作スタジオを併設し、東北タイの伝統音楽の促進と普及を目的とした文化保護事業を積極的に行っている。

P事務所は、モーラム自身が、いわゆる芸能プロダクション的にモーラム事務所を運営している。P事務所では、事務所とモーラム個人の間で書面を通じて契約関係が結ばれる。これは、東北タイの従来のモーラム事務所の中でも新たな試みだといえる。

このように、東北タイのモーラム芸の運営形態における事務所の運営方法はそれぞれ異なり、目的も多種多様である。次項では、上記の4つの事務所の中でも、旧型モーラム事務所と新型モーラム事務所の例として、それぞれNとPを取り上げ、芸の担い手であるモーラムたちがどのように事務所に関与しているのか事務所の側から分析する。

表-1 モーラム芸の運営形態 [2007 筆者作成]

	事務所名 <設立年>	事務所名	場所	運営者	公演内容	収益取得源	師弟関係 <契約方法> 〔学習費〕	伝承方法	工夫事項
a)旧型 モーラム 事務所	A事務所 <1978>	「優良 モーラム 集合セン ター」	マハーサ ラカム 県	一般人	ラム・ムー、 ラム・プルー、 ラム・ルアン・ トー・クロン	公演依頼料の 前金10%、カ セットテープ、 CDやVCD、 書籍、	なし	なし	ラジオ放送 宣伝広告受 付
	N事務所 <1976>	「タイ国 モーラム 奨励事務 所」	マハーサ ラカム 県	モーラム	ラム・ムー、 ラム・クローン、 ラム・スイン	公演依頼料の 前金10%、 事務所前で製 菓販売(雨季 限定)	師弟関係、 <心の契約> 〔20,000B〕	一対一	
b)養成 学校 モーラム 事務所	R事務所 <1988>	「タイの 智慧学び のセン ター」	コンケン 県	モーラム	ラム・スイン	公演依頼料、C DやVCD、音 楽制作スタジ オからの収益、	師弟関係、 <心の契約> 〔20,000B〕	カセット テープ、 テキスト 〔2000B〕、 一対一	養成学校、 学習通信 制、音楽制 作スタジオ
c)芸能 プロダク ション系 モーラム 事務所	P事務所 <1994>	「Pモー ラム 事務所」	マハーサ ラカム 県	モーラム	ラム・スイン	公演依頼料の 前金15%、VC D販売	師弟関係、 <書類契約> 〔40,000B〕	師匠の VCD鑑賞、 一対一	先師礼拝儀 礼のマニユ アル化、顧客 情報データ ベース化

1) 旧型モーラム事務所

N事務所にて、事務所の所長を務めモーラムであるN氏と妻であるモーラムYから聞き取り調査を行った。彼らはモーラム芸の運営において村と芸能者をつなぐ中枢機関であるモーラム事務所について以下のように述べた。

この事務所は、かつてモーラム芸能者を助けるために設立され、モーラム同士が、助け合い、交流し合う場所として存在した。ところが近年、他のモーラム事務所は変わり始めている。1990年に入ってから、モーラムは金稼ぎに必死だ。昔のモーラムは、金が第一の目的ではなかった。助け合うことや、楽しさを作り出すこと、村人に娯楽を提供することを一番考えていたのに、近年のモーラムは、モーラム芸を娯楽ビジネス化 (*pen turakit*) し、金儲けが一番の目的になってしまっている。収入 (*rai dai*)

という言葉が、一番にくるようになってきている。

大型一座を構えるモーラム楽団は、著作権をとってCDやVCDを売りまき、収益を上げている。音響、照明、小道具から大道具、全てが綺麗で豪華になっていく。公演料も高額化する一方だ。しかし、モーラム芸で本当に大切なことは歌詞や物語の内容だ。

(2006年8月28日)

N氏は、今日のモーラム芸自体は娯楽ビジネス化され、金儲けに主眼をおくモーラムがいると考えていることがわかる。N氏にとって、以前のモーラム事務所は、公演依頼を紹介することに加え、モーラム同士の交流や助け合う憩いの場所であった。それが、今日では金儲けを目的とする場所となり、このことをN氏は懸念している様子が伺える。

そして、近年では、金儲けを第一の目的とするモーラム事務所をめぐり、モーラムの間で深刻な問題が生じてきていることについても言及した。

第1に、モーラムと事務所の関係が希薄化していることである。依頼主は、事務所を介さず、モーラム一座に直接連絡をとって値段交渉を行い、一方、モーラム側も、事務所を介さず、公演先で個人の連絡先の電話番号や名刺を観客に教えてしまい自己宣伝を行なう。

第2に、依頼主自身は、1件のモーラム公演依頼において、同時に2つ以上の事務所を訪ねまわり、最も安価な依頼料で交渉し合えた事務所を最後に選択する傾向がある。以前は、N事務所がモーラム芸の奨励事務所的な存在として中心となり依頼を受け次ぎ連絡していたが、事務所を介す者は減少している。ここから、モーラムと事務所の連帯的な相互関係の欠落を指摘できる。

しかし、2006年9月、ウボン県X村の村落社会で出会った古老モーラムZは、従来のモーラム芸のあり方を固持する。古老Zは、伝統的なモーラム芸であるラム・プーンやラム・クローンを得意とした。知識や経験が豊富だと言われ、村人たちから畏敬の念を抱かれる存在であった。村人は、この古老Z本人のいない所で、古老について「寡黙な男で人ごみを嫌い日中は畑で過ごす」、「モーラム芸があるときは、村人が気づかぬ内に村を発ち去り、公演先に赴く人」と話す。この古老モーラムは、都市部にあるモーラム事務所には所属していない。古老Zによれば、「事務所に登録しに行かなくても、公演依頼は入ってくる」と話す。この古老モーラムZのように、事務所がまだ設立されていなかった時代は、事務所を介さずして自ら旅に出て人づてに公演依頼を受け、村落社会を基

盤として芸能活動を展開することが従来の芸運営だったと推測できる。

上述のN事務所の事例で示したように、近年タイ国全土で普及した携帯電話の使用によって村のモーラムたちが事務所を介さずして公演依頼を受けるといふ現象にモーラム事務所の存在基盤が脅かされている。N事務所の経営者たちによれば「アムナート・サムナックンガーン・モーラム・ノイロンモーラム事務所の権威の衰退」は始まっているという。

2) 新型芸能プロダクション系モーラム事務所

ここでは、マハーサラカム県の県庁所在地市内のバスターミナル付近に事務所を構える所長兼モーラムであるP氏が経営するP事務所について説明する。

P氏は、1960年に生まれ、現在はマハーサラカム県を代表する現役モーラム歌手である。P氏の父は、かつてオペラ劇形式のモーラム一座で芸能活動をしていたが、P氏が生まれてから引退した。かつて妹もモーラムとして活動していたが成功しなかった。これを機にP氏自身は、20代半ばにモーラム歌手として生計を立てていくことを決意した。大方のモーラムが10代半ば前後で修行を始めるなかで、P氏は遅めのスタートといえる。P氏は、モーラム・スィンになるために8ヶ月間の練習期間を経て、26歳のときにモーラム・スィンとしてデビューを果たした。1987年に、P自身のモーラム一座を構え、1回の公演料は1,000バーツだった。現在、一回の平均公演料は40,000バーツである⁹⁾。

P氏は、事務所を1994年(当時34歳)に設立した。事務所は、4階建てで、1階は事務所の応接間、2階と3階は弟子たちの練習所および宿泊所、

4 階には仏像や位牌が安置されている。事務所の中央右手にはP氏の作業机が設置されている。作業機の横の壁には公演スケジュールが記載されているホワイトボードが掛けられていた。2006年9月の訪問時の時点で、そのホワイトボードには2006年9月から2007年4月までの公演依頼がすでに埋まっていた。

正面玄関から入って左手の壁には、前述のN事務所と同様、モーラムの顔写真が貼られている。顔写真には、それぞれの芸名が記載されている。写真に映るモーラムたちは、P氏の弟子たちである。P事務所では、N事務所の写真とは異なりP事務所と契約関係を結んだ弟子でなければP事務所の壁にポスターが貼られることはない。

P事務所の運営方法は、前述のN事務所とは以下の点で異なる。N事務所では、依頼主と事務所が契約関係を結んだとしても事務所とモーラムの間では契約関係が結ばれることはなかった。それに対してP事務所では、公演の依頼主だけでなくP氏とモーラムとの間でも書面を通して契約が結ばれる。まず、モーラムとして世に出たい者は、履行要項が記されている契約書を通してP氏との間で弟子入りの契約を結ぶ。それと同時にP事務所の一員として所属することになり、P氏の下で芸能活動を行うことができるようになる。契約期間は15年間と決められている。途中で契約破棄は可能である。そして、弟子入り費用としてモーラムはP氏とP事務所に対して、40,000 バーツを一括もしくは分割で払わなければならない。この40,000 バーツには、P氏による作詞代や稽古代などが含まれている。

このようにして、モーラムは多額な金額を支払いようやくモーラムP事務所の一員として芸能活

動ができるのである。P事務所では、事務所の運営が師弟関係と連動しており、前例のN事務所とは全く異なっている。P事務所に所属した後は、専属となるモーラムの履行内容や禁止事項に関する15条から成る規約を遵守しなければならない。P氏によれば、このような厳しい項目はモーラム事務所の権威と神聖さを保つために必要だという。また、芸の公演前に行われる先師礼拝儀礼に用いられる道具については、契約書とは別途用意された紙にまとめて配布される¹⁰⁾。

P氏は、いわばP事務所の専属社員となったモーラムを事務所の看板スターにするために、様々な観点から見ているという。それは、モーラムとしての歌唱における資質、能力、容姿、真摯な姿勢、一生懸命さ、真面目さ、そして支援者（保護者）の承認・許可・支援である。さらに、弟子たちには、人当たりのよさ、人道、素直さ、責任感、時間厳守、研鑽努力を惜しまない姿勢などを教えているという。

このようなP事務所の運営形態をもつモーラム事務所を、ここでは新型芸能プロダクション系モーラム事務所と呼ぶ。

次に、P事務所とモーラム芸を主催する依頼主の関係をみる。依頼主がP事務所にモーラム・サインを探しにやってくると、まずP氏は、依頼主と希望日時、場所、希望するモーラム歌手について交渉を始める。P氏自身への公演依頼であれば40,000 バーツであり、弟子たちの場合は経験年数によって公演依頼料が異なる。それは、熟練（5年以上）、中堅（2年以上）、初心者（1年未満）の3段階で分けられている。しかし、芸能経験年数に関わらず個人の能力や資質によっては昇格や降格がある。また、依頼主が、どのモーラム・スイ

ンを選ぼうか迷った場合は、依頼主にポスターに映るモーラムの年齢、経験年数、さらには歌唱力、容姿、踊り方の特徴などを具体的に説明して選択肢を絞らせる。そして、最終的には依頼主自身に自分でどのモーラムに公演を依頼するのか決定してもらおうようにしている。

続いてP事務所と依頼主の間で書面を通して契約が結ばれる。13条の規約が書かれた契約書類は3枚綴り式になっており、事務所、依頼主、そして公演に赴くモーラムに渡される。P氏は、この3枚綴りの書類のお陰で、3者間の金銭的なトラブルを防ぐことができるという。交渉成立後、P事務所は依頼主からは手付金として公演料の15パーセントの金額をもらう。前述したN事務所の10パーセントよりは若干高めである。手付金を多めに取るのは、依頼主に公演のキャンセルを極力させないためだと、P氏は話す。公演料を払わない場合は、法的機関を通して公演料の10倍の金額の損害賠償が依頼主に請求される。また、雨天や停電が起きて公演を中断せねばならなくなった場合、依頼主は契約した公演料を払わねばならない等、契約書類には詳細な取引条項が書かれている。契約内容の大半は、公演料に関する事柄であり、収益において損害を被らないようにしている。

P事務所では、顧客の過去の公演依頼件数や内容などをコンピューターに入力し、顧客情報を管理している。この経営方法は、東北タイのモーラム事務所のなかでも新たな試みである。P氏は、顧客が次回のモーラム芸の公演を依頼するときデータ・ベース化した情報が手助けになると考えている。モーラム・スィンは売るための「商品」として扱われ、依頼主は「顧客」と考えられている。

上述のように、師弟関係と事務所への所属が同時に連動して行なわれることは、東北タイにおけるモーラム芸の運営において画期的な試みである。

3. 芸の運営にみる伝承形態の変化

(1) モーラム芸の伝承形態

本節では、師匠にあたるモーラムを「モーラム師」、弟子にあたるモーラムを「見習いモーラム」と表記を使い分け、師弟関係と伝授方法の2つの視点からモーラム芸の伝承形態とその変化について見ていく。ここでは、伝統的なモーラム芸であるラム・クローンと、近代的なモーラム芸であるラム・スィンの両方に分けて考え、娯楽ビジネス化を軸に展開するモーラム芸の運営形態がモーラム芸の伝承形態にどのような影響を与えているか明らかにする。

1) 師弟関係

モーラムの師弟関係は、一般的にモーラム師に一定の学習費（謝礼）を納め、弟子入りを願ひ出ることから始まる。そして、弟子入りが許可された見習いモーラムは、師匠からモーラム歌がもつ独特の詩形や旋律を学んでいく。以下は、上述したN事務所のN氏の妻であるモーラムY（以下、Yと記す）が、モーラム師に弟子入りし、見習いモーラムとして複数のモーラム芸を習得していった過程、そして自身がモーラム師となるまでの経緯をまとめたものである。

Yは、1960年にローイエット県で9人兄妹の5人目として生まれた。両親はモーラムではなく、9人の兄妹のうちYだけがモーラムとなった。幼少時代、Yの家庭は米を入手できなかったため、隣

家にご飯をもらいに行くことがYの日課だった。走ることが得意で、小学校では陸上の短距離選手に選ばれ、学校でも成績優秀だった。11歳の時に、歌を本格的に練習しだし、周りの大人たちから東北タイで人気の旋律の一つであるラム・プルーンの練習をするように助言を受けた。Yはモーラムになりたい一心で、モーラム師のもとへ弟子入りたいと両親を説得した。Yの父親は許可をしたが、母親は、自分の娘が人様の前で芸を演じることに反対した。12歳のとき、父親に連れられてコンケン県に住むモーラム師のところへ弟子入りを願いにいった。十分なお金はなかったが、モーラム師は弟子になることを許可してくれた。12歳で親元を離れ、モーラム師の自宅に見習いモーラムとして住み込み詩形や物語を覚えていった。14歳のときに、ラム・プルーンとして初舞台を踏み25パーツの初収入を得た。

Yは、17歳で結婚し、24歳で3人目の子どもを出産した。体の調子が悪く仕事ができなかったが、歌を練習し続けた。そして、25歳でモーラム・スィンとして舞台復帰を果たした。この頃より、次々に公演依頼が入りだし、Yの知名度は上がっていく。公演料も値上がりし一晩で700パーツを稼いでいた。当時、周りのモーラムで日当700パーツを稼ぐ者はいなかったという。そして、モーラム・スィンを演じながら、モーラム・クローンで有名だった師匠のもとに弟子入りを願いでラム・クローンの勉強を始めた。モーラム師への学習費には、7,000パーツ払った。モーラム師からは、ガラシン県とウボン県地方特有のメロディーを教えてもらった。この頃、事務所を運営しモーラム・クローンで活躍していたN氏と出会って再婚した。1995年頃から現在にかけて、Yの収入は

10,000パーツである。当時は年間100回以上の依頼があったという。Y自身は車を、両親には家を購入した。40歳のときに、モーラム・スィンを引退し、伝統的なモーラム芸であるモーラム・クローンに芸能活動を切り替え、今日に至る。

Yによれば、幼少期は経済的に恵まれず、貧しい生活を送っていた。これについては他の50代～70代のモーラムへの聞き取り調査で得た資料や先行研究を調べた結果、モーラムの多くが、幼少期は経済的に恵まれず貧しい生活を送っており、弟子入りを願ひ出るときは謝礼を渡せず師匠宅の家事や農作業などを手伝って働きながら歌の稽古をしていた [Sathanak 1993:6-7]。

伝統的なモーラム世代のモーラムは、「ムアン・ルーク・マイ・ミー・ポーメー 孤児同然」と呼ばれた。Yの場合は、女性であったことから父親が師匠のもとへ連れて行ったが、モーラムの中には一人で弟子入りを願ひ出にいくものもいた。モーラムになるために一度、親元を離れたら、一人前のモーラムになるまで実家には戻らない。雑嚢一袋を肩から下げ、有名なモーラム師を探し出し、弟子入りを願ひ出る。願ひ出た先で、既に沢山の弟子が学習していることから、弟子入りを断られることもある。その場合、モーラムは、寺院を訪ね、僧侶から三蔵の教法を教わり教養を深めていった。このように、師匠を探し出し、弟子入りの許可を得るまでの過程の難易には個人差がある。

Yの話から分かるように、モーラムは師弟関係が結ばれることに始まり、様々なラムの演技を習得していくために弟子入りを願ひ出るという経験を重ねる。そしてここ数年で、Yは自身がモーラム師となる経験をする。Yによれば、この5年間で、4人の弟子が自分の下を訪れ、弟子入りを願

い出たという。Yは、自分がモーラム師となったことについて、以下のように述べた。

今は、4人の弟子がいるけど本当は自分自身がモーラム師になるとは夢にも思っていなかった。私の下でどうしても弟子になりたいと訪ねてきた子達が出たとき、師匠になったけれど、実際は師匠になることについて色々悩んだ。弟子をもち、その子を一人前にすることに責任の重さを感じたし、自分自身はまだ修行の身でもあることを考えたからだ。でも自分が弟子入りした時のことや、当時の師匠が私を受け入れてくれたことを思い出し、弟子をもつことを決意した。

このようにモーラムとしての長年の経験と実力が備わっていても「弟子をもつ」ことに対して悩んできたYの話から、モーラムの中には、モーラム師になるという点において、「師になる」ために覚悟を必要とし責任感を強く感じている者がいることが読み取れる¹¹⁾。

Yは弟子入り時の学習費を20,000バーツに設定しているという。弟子入りしたときに学習費として20,000バーツ払えば、歌の稽古の練習頻度に関わらず永久的に師匠から指導を受けることができる。また、経済的に困難で20,000バーツが払えない場合は、分割払いでも認めている、とYは話した。

以上、Yが師匠になるまでの経歴とモーラムの師弟関係をみてきた。Yの場合、モーラム師になったことは思いもよらず自分の身に起きたことであつた。また、Yの経歴からも分かるように、彼女の家族には誰一人とモーラムがいなかったことは当時のモーラムのなかでは珍しい。Worajinda

の研究[2005]では、モーラム師となるモーラムは、血縁関係にある者にモーラムが多くおり、幼少期からモーラムの歌やメロディーを聞いて育ち、自然にモーラム師になっていくケースが多い。次のモーラムR（以下、Rと記す）の事例がこれに相当する。

R事務所（表-1参照）の経営者兼モーラム師であるRは、1952年にマハーサラカム県のモーラム一家の5番目として生まれた。両親は、モーラム・クローンで、7人兄弟姉妹のうち5人がモーラムである。幼い頃より、父や兄のモーラム芸の公演についてまわり、モーラム歌がもつ独特の旋律や詩形は自然に体で覚えていった。Rは、モーラムである父や兄から詩の作り方を教わったという。つまり、Rのモーラム師は、家族であつた。Rは、22歳から23歳の頃にかけて、弟子をもつようになった。始めの頃は、弟子たちを本気で教えていたわけではなかったという。しかし、弟子の両親やR自身のファンたちが、Rのモーラムとしての技量を評価して本格的に教えるよう説得した。これによりRは、モーラム芸を次世代へ伝承していくことへの使命感に目覚める。1986年には、Rのもとでモーラムを学びたいという見習いモーラムが増えていき養成学校を設立した。このようにして、Rは周りの人々からの励ましや要求によってモーラム師になっていった。

ここで上述のYとRの話から、師匠と弟子が関係を結んでいく過程に着目する。2人にはそれぞれ弟子たちがいる。彼女たちは学習費を最初の段階でもらうようにしているが、いずれの弟子とも書面を通じて師弟関係の契約は結んだことがないという。YとRは、「モーラムにおける師弟関係とは、“心で契約を結ぶ (*sanya cai*) ”ものである」

という。YとRはそれぞれ異なる地域に住んでおり、面識のないモーラム同士である。しかし、両者からそれぞれ出された「心の契約」という共通した見解は、モーラムの師弟関係を理解する上で重要である。なぜならば、前述したP事務所のP氏が師弟関係について話したとき、「心の契約」という言い方は聞かれず、書面契約が師弟関係の支柱となっている。心のつながりが重視されているモーラムの師弟関係はP事務所にはない。師弟と弟子の間に結ばれる「心の契約」から分かるように、モーラムの師匠と弟子との関係には、目には見えない信頼関係や心と心の繋がりが重視されている。

2) 伝授方法

モーラム芸の伝授方法は、モーラムの世代や師弟関係のあり方によっていくつかのタイプに分けることができる。ここでは、以下の3つに大別する。

1 つ目は、主に口頭で師匠と弟子の一对一で行われる伝授方法である。まず、モーラム師は口頭で詩形を読み上げ、弟子はそれを紙に書き留める。次にモーラム師は、節々ごとに抑揚をつけて歌い、弟子に復唱させながら、その抑揚のリズムと歌詞を覚えさせていく。そして弟子が詩を歌えるようになると詩形のつくりを学ばせ実際に作詞の練習に入る¹²⁾。

2 つ目は、師匠が作成した詩形をまとめた学習用テキストと師匠の声と伴奏が録音されたカセットテープのセットを2,000 パーツで購入し、それを覚えるという通信制の伝授方法である [Smutkhupt 2001:302]。これはR事務所でも活用されており、モーラム師が遠くに住んでモーラム

養成学校まで通うことができない弟子たちのために考え出した伝授方法である。

3 つ目は、P事務所に所属する専属モーラムたちとP氏の間で活用されている伝授方法である。見習いモーラムは、師匠のモーラム芸の公演が録画されたVCDを鑑賞し、芸の演技方や踊り方、公演中の立ち振る舞いなどを学ぶ。これによって個人練習だけではなく踊り子たちとも共同練習ができる。また先師礼拝歌やモーラム歌については、師匠がパソコンで作成した詩を印刷してもらい、抑揚をどのようにつけて歌うのか直接的な指導を受ける。そして帰宅後、VCDの鑑賞をしながら復習する。P氏は、事務所の経営で忙しく、なかなか弟子全員に個別指導をすることはできない。そのため時間があるときに弟子たちを事務所に呼んで指導しているという。このVCDを利用した伝授方法を導入したことで、多くのモーラムは、1ヶ月から3ヶ月でモーラム・スィンとして初舞台を踏むことができるという。

次節で論じるP事務所に所属する若手モーラムであるTは、モーラム・スィンとして世に名を広め公演件数を増やすためにP事務所に弟子入りをして専属モーラムとなった。事務所に契約手続きをしたときに、40,000 パーツの契約金(師匠への弟子入り費用込)を納金したが、費用に見合うだけの稽古時間や特別指導があるのかということ、その逆であるという。モーラムTの親戚によれば「モーラムTは、師匠から1,2曲作ってもらった後は、あまり個人的な稽古時間は設けられていない。VCDを買わされて、それを鑑賞して歌の稽古や踊りの振り付けを勉強している」という。このようなP氏のVCDを活用した伝授方法によって、従来は師匠と弟子が一对一で稽古をしていた時間が

減り、モーラム芸の伝承形態において師弟関係は希薄化し、事務所の社長と社員という事務的な関係になりつつある。これは、次章で論じる村落レベルでモーラム芸能集団をみていくと明らかになる。

モーラム芸の伝承形態は、事務所の運営との関わりにおいて師弟関係のあり方だけでなく修行場所や修行期間にも影響を与えている。1970年代半ばのラオスのモーラムたちの伝承形態は、男性であれば僧侶から直接的に詩作方法を学び、女性であれば寺院を訪問して僧侶から詩作方法を教わっていた。そして抑揚をつけた歌い方や踊り方については、女性モーラムを訪ねて勉強した〔Compton 1979 : 111-112〕。このようにモーラムは、師匠の自宅だけでなく寺院を訪れ、僧侶たちから詩形や作詞方法を学んでいた。先述のモーラムN（74歳）は、モーラムになるために15年間の修行を積んだ。その修行期間中に出家僧となり、仏教説話や経典を読み込み知識や教養を深め詩作方法を学んでモーラム芸に役立てたという。

しかし、近年のモーラム芸の伝承は、師匠から直接的な指導や作詞方法を学ぶよりも、師匠が制作したカセットテープやVCDを利用した伝授方法が考案されたことで、見習いモーラムたちは師匠の自宅、学校、寺院ではなく、自宅でVCDを鑑賞しながら歌の稽古に励むようになった。

これはモーラムになるための芸の修行期間に影響する。古老モーラムたちによれば、一人前のモーラムになるためには、短くて2、3年、長くて10年以上の修行期間が必要だという。伝統的なラム・クローンは、男女2人のモーラムが、夜から朝まで長時間にわたって競演し合う。長丁場で80から100以上もの長詩を歌いあげることができる

ようになるためには、相当の訓練と経験を要する。一方、モーラム・スィンは、個人差はあるが、早い人で1ヶ月から3ヶ月、遅い人で1年から2、3年以内でモーラムとして初の舞台に立つことができる。このように修行期間が短縮化している傾向にあるのは、従来、一対一の詩形の伝授方法に、カセットテープやVCDが導入されたことが考えられる。またラム・スィンでは、従来の伝統的なラム・クローンに比べ、ラムを披露する回数が減り、それに替わって流行のストリングやルーク・トゥン歌謡を随所に入れながら歌う。そのため、モーラムたちは師匠の公演を録画したVCDで公演の型を学ぶと同時に、市場で購入してきた歌謡のVCDやCDをできるだけ多く聴いて観客の歌謡曲リクエストに答えられるように準備しておく必要がある。このためラム・スィンは、従来のラムの習得に励む修行に時間を割く必要はなく、歌謡曲の練習をすれば少数のラムの歌詞と歌謡曲で一晩の公演を演じることができるのである。

4. 事務所と芸能者集団の芸運営にみる選択

(1) 村落社会におけるモーラム芸能集団

本節では、マハーサラカム県B村に住むモーラムT（2006年調査時、21歳、以下Tと記す）を中心に村のモーラムがいかに関与しているかを説明する。Tは、前述のP事務所に所属している専属モーラムであり、P氏の弟子である。

B村は、県庁所在地であるマハーサラカム市内から南西へ約60キロ（コンケン市から南東へ約80キロ）に位置する。B村から市内までは一日に朝と夕方に二本のバスが走る。B村の中心を走る中央道路には、「モーラムT・P」という看板が電

柱脇に立てかけられている。P氏の芸名を授かったTは、P氏にとって期待の星といえよう¹³⁾。

Tは、1986年生まれ、父、母、T、弟、妹の5人家族である。幼少期から音楽が好きで、Tは13歳のとき中学校で音楽同好会に入り地方音楽楽器バンドで演奏をしていた。祖父や両親は、以前は長編物語劇形式であるラム・ルアン・トー・クローンの演技手たちだった。親の奨めもあり、16歳のときに、村のモーラム一座に入り、劇形式ラム・ルアン・トー・クローンの主演でモーラム芸の初舞台を踏んだ。当時は、一晩で300～400パーツの稼ぎがあったという。18歳になるとモーラム・スインの勉強を始め、20歳でP事務所への所属を決意し、芸能活動を続けて今日に至る。Tの特徴はハスキーヴォイスで長く伸びる心地よい声である。

市内のP事務所に専属モーラムとして所属するTは、B村に一座を構えている。その一座の構成員は、歌い手であるTと6人の踊り子たちから成る。6人の踊り子のうち、モーラムTと血の繋がった家族や親族は3人で、モーラムTの妹、従妹2人である。残りの3人は、B村に住むTの妹の友人で、10代半ばから10代後半の地元の少女たちである。

Tは20歳のときにP事務所に所属して芸能活動を始めようになった。芸能活動を始めた頃、P事務所からはTがB村で踊り子を用意することができるかという問い合わせがきた。彼は、妹や親戚、身近な知人に声をかけて踊り子を募った。その結果、集まってきた村の少女たちが、現在の6人の踊り子たちである。この踊り子たちは、「Tの踊り子たち」と考えられ、P氏は氏自身の踊り子たちを別に確保している。したがって、村

の踊り子たちは、P事務所と契約を結んでいる訳ではない。踊り子であるTの従妹は、「踊り子は、チップやお金がもらえるからやっている」と言う。村の踊り子たちは、一回の公演で200パーツから300パーツを稼げるためお小遣い感覚であるようだ。東北タイの村落社会における日雇いの日給とほぼ同額のアルバイト代である。

モーラム芸能集団は、タイ語で「一座^{カナ} (*khana*)」と呼ばれる。タイ語で「一座^{カナ}」は、全体の一部から分岐した集団の名称である。B村で芸能活動をするモーラムTの芸能集団は、Tの師匠であるP氏のP事務所の一部から分岐しているため、「一座^{カナ}」と呼ばれる。しかし、T自身は上記の集団名称を用いず、彼自身の集団を「^{クローブ・クルア}家族 (*khroap khrua*)」と表現する。Tによれば、1年間の3分の1の時間は成員と共に過ごしているため「^{クローブ・クルア}家族」と同然という。食事を共にし、公演の準備のために踊りの練習に励み、衣装を作る。実際に、Tの芸能集団は血縁関係で結ばれた家族の力を頼るが、ここで言う「家族」の範囲は通常における家族や世帯を超え、より広い「血縁集団」に及ぶ。Tの事例によらず、村のモーラム芸能集団は血縁集団を核として結成されることが多い。

公演には、踊り子の女の子たちだけではなく、公演の司会者や裏方の仕事が必要とされる。たとえばTの場合、彼の父が公演の司会者をし、母や従姉Mは踊り子たちの衣装作りに必要な布や装飾類、裁縫セットを市場へ買いに行き、徹夜で踊り子たちの衣装を作る。Tの従姉Mの夫は、農作業で使用している自家用のピックアップトラックを運転し、一座の運転手を勤める。

このようにTの公演は、家族のみならず親族・友人たちの協力によって支えられている。P氏は、

「Tは支援者に恵まれている子だ」と話す。村落社会においてモーラムとして芸能活動をする際、事務所の経営者は、家族や親戚など身近にいる人たちの協力や支援の有無がポイントとなる。

Tは、決して経済的に恵まれた家庭で育っている訳ではない。父は、村の行政区での事務仕事をしており、月収は4,000 バーツである。母は、一着につき6 バーツのズボンやシャツを何百着と縫って収入を得る。弟は、高等学校を卒業後、村に戻ってきて実家にいるが、請負業者の仕事があれば市内やバンコクへ行き日雇いで100 バーツを稼いでいる。妹は、中学2年生で成績一番の優等生

であり、家族や親戚の間で良い歌声をもつと評判のため、学業と両立させながらモーラムを目指す。現在は、兄であるTの公演の踊り子として小遣いを稼ぐ。Tの家族は農地を所有していない。そのためTの家族は、父親の月収とTの公演の収入に頼っている。

Tは、2006年3月は合計5回の公演依頼を受けた。公演料は、24,000 バーツである。しかし、公演人数の関係や音響設備の費用のために、日当の手取りは4,000 バーツから5,000 バーツである。公演料の内訳は、以下の通りである(表-2)。

表-2 モーラム・スインの公演依頼料の内訳

公演依頼料	24000	24000
内訳		
モーラム男	5000	5000
モーラム女	5000	5000
モーケー(2人)	700×2	1400
ダンサー(6人)	300×6	1800
音響(音楽バンド)	8000	8000
事務所(公演料10パーセント)	2400	2400
諸経費(ガソリン代)	400	400
合計	24000	24000

[出所：2006年3月14日のモーラムTの公演の事例より 筆者作成]

今日、東北タイの大卒で貰える月給額が6,500 バーツ前後(バンコクなどの都心部であれば8,000 バーツ以上)であることを考えると、グループの成員に公演料を配分したとしてもほぼ1ヶ月の給料を一晩で稼いでいる。

Tは、2006年4月中旬にP氏の事務所を介して3日間連夜の公演依頼を受けた。しかしTは、その内の2日間しか行けず最終日はキャンセルした。まだ駆け出しのモーラムであったためか声が潰れてしまったのである。見舞いも兼ねてTの家に伺

うと、彼は掠れた声で「最近(公演に)行っても、それに見合っただけのお金が稼げない(*pai bo khum*)。だから今日は行かなかった。」と言う。彼は、2日目の公演は、昼間に行われる5時間の公演だったため、手取りで貰えた金額は1,400 バーツであった。そして、3日目の手取り金は同額であり、声の状態も考慮して公演をキャンセルしたのであった。

P事務所におけるモーラム・スインの公演は、契約成立時に決められた拘束時間によって公演依

頼料が変わり、それと同時にモーラムが貰える金額も変化する。したがって依頼料により公演を引き受けるか引き受けないかを判断するモーラムもいる。今後、Tがモーラムとして舞台経験を積み重ね、熟練モーラムと見なされれば公演依頼料も値上がりする可能性はある。

Tは、先述したように稽古指導を受けることができない現状に対して師匠やVCDのみに頼るのではなく、かつてモーラムだった彼自身の家族を頼り、村における伝承形態を利用する。Tの祖母は、伝統的なモーラム芸のモーラム・クローンである。また両親は、双方ともにオペラ劇形式のモーラム歌手として9年間のキャリアをもつ先輩であり、村落を基盤に活動していた村のモーラムたちでもあった。身近な家族にモーラムがいるという恵まれた環境で育ったTは、師匠を頼ると同時に、身近な父親も頼る。Tは、公演が終わる度に父親から助言や改善点などの指導を受ける。またTは、モーラム・スィンの公演中、P氏が作詞した歌詞以外で、父親が作詞し教えてくれた歌を歌う。Tが独特の節回しで歌う「マノラー物語」は、父親が一对一で教えてくれた歌である。Tが「マノラー物語」を歌い始めると、村人たちはその歌詞をじっくりと聴く。

P事務所に所属するモーラムの芸能活動には、弟子入り費用の他に多額の出費が必要となる。Tの場合、事務所の専属モーラムになるための投資金額40,000パーツに加えて、ポスターの写真代、師匠のVCD購入代金、衣装代、ラジオ放送局での宣伝広告への投資金などである。総額は60,000パーツを越える。B村の住民の平均年収額が20,000パーツであることを考えると高額といえよう¹⁴⁾。

モーラム芸の活動に多額の「投資 (*long thun*)」が不可欠である現実に対して、Tの父親は「自己への投資」を教える。父親は、今後、Tがモーラムを職として生計を立てていくにしろ、そうでないにしろ投資について学ぶ良い機会だと考えており、投資をするからには、金が廻り巡ってもとの場所に戻ってくる (*wian pai wian ma mun wian klap ma*) 投資でなければならない、と話す。タイの人々は、しばしば「廻る」と「返る、戻る」という単語を語呂合わせとして、「(良縁・悪縁を含めて) 自分の元に戻ってくる」という言い回しをする。この「廻る」は仏教思想の輪廻転生観の「廻」にあたる。Tの父親は、このような伝統的用語を用いながら、「金を使う」、「投資する」が、いつかは「廻って戻る」ことを願って使ったとも考えられる。同時に、彼自身が「投資」という用語を使うことは単に資本主義社会における合理的判断に基づく「投資」という意味には留まらず、息子のための「投資」は善いことをしておけばいつか良い報いが自分の元へ巡り廻って返ってくるという考えに基づいており、タイの功德原理理解のなかで解釈している側面もある。

以上、Tの芸能集団と事務所との関わりを見てきた。Tの芸能集団は、血が繋がった家族や親戚が中心となって助け合いながら活動をしていた。その芸能集団のカリスマ的中心人物であるTは、P事務所と契約関係にある。しかし、Tは、P事務所の専属モーラムであり、P事務所の芸能の運営形態に組み込まれてはいるが、家族や親戚や友人に支えられながらB村を活動拠点として、P事務所のモーラム芸の運営とは異なる芸能活動を展開していた。

また師弟関係を軸に運営される事務所の登場は、村落社会で活動するモーラムたちにいくつかの利点を与えた。それは、モーラム自身として世に名を挙げる機会の獲得、公演領域の広域化、芸能の回数を増やす機会である。一方、B村におけるTの事例をみていくと、モーラム側にとって不利な点もあった。それは、書類契約やVCDを活用したことで師弟関係のあり方がよりビジネスライクになり希薄化し、伝承形態が変化したことである。しかしTは、P事務所との繋がりを保ちつつも、村落社会における血縁集団を基盤として芸を運営し、伝承している村落社会に深く根ざしたモーラムである。村のモーラムは、村の人々に支えられ村に基盤を置きながら芸能活動を続けている。

(2) モーラム芸がもつ可能性

本節では、伝承形態にみる変化に加えて、村落社会で芸能活動を行うモーラムたちに焦点を当て、モーラム芸の娯楽ビジネス化は村のモーラムたちに何を与えたのか、一方、村のモーラムたちはどのように娯楽ビジネス化していくモーラム芸と向き合っているのかについて考えてみたい。

1970年代以降、モーラム事務所の設立によって、村落社会で芸能活動をするモーラムたちは、公演の機会を増やし、活動領域を広域化させることが可能となった。前述のTの事例では、モーラム・スインの歌手たちは一晩で高額な金額を稼ぐと理解できる。これは村落社会に住む男性だけでなく、女性にとっても大きな意味をもつ。前述したYによれば、かつては女性がモーラムになることは社会的に蔑まれ見下されたが、近年では、もし自分の娘が一人前のモーラムになったら、その親は村で誇りをもって生活ができるという。これは、

モーラムとして生きていく女性たちへの社会的評価が以前に比べて改善されていることを意味する。その理由は、モーラムが高額の収入を一晩で稼ぐ職業であるからに他ならない。

従来のモーラム芸能活動は、田畑を耕していた農民たちが農閑期などを利用して行っていた。しかし今日では、モーラム芸の収入は、農民の年収をはるかに上回る。娯楽ビジネス化が進んだモーラム芸の運営に関与していくこと、それは、村落社会のモーラムたちにとって多様な機会をもたらしたのであった。

モーラムTは高校卒業と同時に、モーラムとして生きていくことを決意した。Tは、生涯にわたり歌を歌って生きていきたいと熱く語る。近い将来は、現在所属しているP事務所や師匠から独立する計画を立てている。モーラムTは、師匠であるP氏のようになり、モーラムで生計を立てながら経済的・物質的な豊かさを得たいと語る。このように今日の東北タイにおけるモーラム芸は、村で生きる人々に一つの職業選択肢を与えているといえよう。

2004年に筆者が傾聴した地方大学で開催されたセミナーでは、コンケン県を代表する古老モーラムDが、「モーラム・スインは(伝統的な)モーラムとは一線を画するもの」というテーマで演説を行い、途中から軽快なリズムで即興ラム(抑揚をつけて唄うこと)へと次第に変わり、以下のよう

に説いた。

今日のモーラムには、二つのタイプがある。モーラム・アチーブ(職業モーラム)とアチーブ・モーラム(モーラムで稼ぎを得る人)だ。前者は、宗教、仏教説話、物語、考古学、歴史学、政府が打ち出す様々

な政策などを学び、自分の芸の技を磨き、即興で詩形ができるモーラムである。後者は、師匠から学んだことしか表現せず、自分で歌詞を作ることも、独学することも知らないモーラムである。

(2004年8月20日)

一見すると、古老モーラムの即興ラムは、「モーラム」と「職業 (achip)」の2つの単語で言葉遊びをしているかのようであったが、シニカルな意味合いを含意する。ここには、音楽産業と関わることになった娯楽ビジネス化する東北タイのモーラム芸に対する批判がある。古老Dによる即興ラム部分からは、従来の芸の伝授方法や内容自体の変化への懸念に加え、「前者」の職業的芸能者として生き抜いてきた古老モーラムの意地とプライドが感じられる。

しかし、モーラム芸の娯楽ビジネス化は、村のモーラムたちに対してモーラムを職として生計を立てていく可能性を与えたことも事実である。Tと同じB村に住むモーラムS（以下、Sと記す）という女性モーラムについて述べたい。

Sの家族は、両親がモーラム、さらに9人兄妹のうち彼女を含めて4人がモーラムである。絹織物、機織、農業を家業とし、モーラム芸の公演や妹たちの職で稼いだ収入で生計を立てる。Sに職業を尋ねると「農業」と答える。

Sは、15歳の頃から歌い続けてきた。10代の頃は、村のオペラ劇形式モーラム芸を主に演じる一座に所属し、農作業の合間を縫って練習し公演を重ねた。Sは、伝統的なモーラム芸の形態を演じることができたため、他の一座からも出演の依頼を頻繁に受け手伝った。またSの芸能経歴には、東北タイで有名な某大型モーラム一座の歌手とし

て活躍していた時期がある。当時のSの生活は、朝6時に公演が終了し、顔を洗って就寝し、正午前に起きて「朝食」を食べ、夕方4時頃より公演準備を始め、9時には開演し朝方に終演する。このような一日のサイクルで、当時は体力的にも精神的にも疲れていた、とSは回想する。しかし、過酷な芸能活動にも拘らず、公演終了後に一座からは日給をもらえず、公演で赤字がでた場合は、手取りで貰う金額は減額されるという不当な扱いを受けた。Sは、労働内容に見合った収入を稼げないという理由から、大型モーラム一座を脱退しB村に戻ってきた。Sは、35歳の時に兄妹や親戚を募ってモーラム一座を作った。彼女によれば、たとえ小さな一座でも一晩で確かな収入を稼ぐことができると思いついたことが一座を作った理由である。そして彼女は大型モーラム一座での経験を活かし、B村での一座を運営する。大型モーラム一座と比べると、一晩の公演料は圧倒的に少ないが、赤字を出さなければ、公演内容に見合うだけの収入を得ることができる。Sは、一般農民すべてが裕福な生活を送っているわけではない状況を把握しており、一般農民も払えるモーラム芸の公演料を設定している。

また、Sは昨年か夫Lとともに、B村にモーラム事務所を設立しようと計画中である。Lは、かつて大型モーラム一座の運転手をしており、一晩で800パーツ稼ぐ職に就き、貯蓄を続けてきた。SとLは双方の長年の経験を活かし、夫婦でB村にモーラム事務所を築くことが二人の夢だと話す。ここでいう「経験」とは、娯楽ビジネス化したモーラム芸を運営する大型モーラム一座で歌手や運転手として芸能活動に携わった経験である。

現在、SとLが住んでいる家を事務所にするには、総額約90,000 パーツかかる。建築資材は、全て彼ら自身で購入し彼ら自身で事務所を建てる。家の前には、踊りの練習ができるように小さな舞台を拵えたいとLは話す。このようなLとSのモーラム事務所の設立計画には、多額の投資が付き物である。しかし、Tの父親と同様、Lは「現在、投資したお金が将来的に戻ってきてくれることを願う、B村に立派なモーラムの輩出場を作りたい」と話す。Lも、「モーラム芸」の運営を通じてお金の投資を惜しまず、想いを「モーラム芸」に馳せている様子が読み取れる。

以上、B村のTの独立計画とSのモーラム事務所の設立計画について述べてきた結果、今日の東北タイで芸能活動をする村のモーラムたちに映る「モーラム芸」とは、職業選択肢の一つとして位置づけられ、また、金銭を絶えず獲得できる財源とも考えられる。県庁所在地市内にあるモーラム事務所が不要となりつつある今、村のモーラムたちは、事務所での経験を通じてモーラム芸の運営方法を学び、そして村に戻っていき、村を基盤として芸能活動を行うという、村で生きる芸能者となっている。

5. おわりに

本稿では、東北タイの近代的なモーラム芸であるモーラム・スィンの担い手たちと1970年以降に設立されていったモーラム事務所を取り上げ、娯楽ビジネス化を促進する事務所の運営が芸能者の伝承形態にどのような変化をもたらしたのか、また村のモーラムが事務所の運営にいかに関与し、個人の芸能活動の実践においてどのような選択を

行なっているかについて分析していった結果、以下のことが明らかになった。

モーラム事務所の登場は、従来のモーラムたちの芸能活動におけるモーラムと村落社会のネットワークを拡大し、それによってモーラム側にとっては公演の機会を増やすことが可能となる。一方、事務所の一部には、P事務所のように村のモーラムたちとの繋がりを保ちながらモーラム・スィンを商品として芸能プロダクション的に運営する事務所も登場した。

従来、師匠と弟子という師弟関係に、事務所との契約と師弟を結ぶ契約の二つの契約が組み合わさったため、従来のモーラムたちにとって芸能活動の核となっていた師弟関係が変容し、それによって伝承形態も変化した。東北タイの村落社会に娯楽ビジネス化と深く関わるモーラム事務所が入ってきたことは、村のモーラムたちにとって大きな意味をもつものであった。

モーラム芸の娯楽ビジネス化は、モーラム事務所による運営形態に加え、村落を基盤として活動を続けるモーラムの芸能活動の運営形態があつてこそ成立している。モーラムTの芸能集団の事例のように、村のモーラム芸能集団との繋がりがなしに、事務所によるモーラム芸の娯楽ビジネス化は成立しない。言い換えれば、芸の運営形態において都市部のモーラム事務所の運営形態と村落社会における芸能活動の運営活動とが二重の構造となつて成り立っているが故にモーラム芸は見られる。

今日の東北タイにおけるモーラムは、モーラム芸の娯楽ビジネス化を通じて、モーラム芸に新たな可能性を見出そうとしている。B村のモーラムたちのように、彼らは村に戻り、血縁社会を組み込みつつ、村を存続基盤としてモーラム芸を受け

継いでいくしたたかな芸能者たちである。そこには、しばし現地の人々が批判的な意味を込めて語るような金儲けを主眼として展開するモーラム芸の娯楽ビジネス化とは異なった、村のモーラムたちの姿がみられる。地域芸能とビジネス化の関係は、経済発展や市場化によって、上演形態、運営形態などにおいて変遷は遂げてはいるものの、その根底は地域に深く根差したものであり、ゆえに持続可能かつ自身の生活レベルをあげる機会としている点で戦略的であるといえる。

今後は、1960年代以降、タイ国民国家において東北タイにおける古老モーラムたちが果たした役割を手がかりに、芸能者と国家の繋がりをみることに課題となろう。

【注】

¹⁾ 本稿では、モーラム芸能自体を指すときはモーラム芸、芸能者を指すときはモーラムと使い分けて表記する。また、本稿で使用されるタイ語のローマ字表記は、タイ王国土学院から出版されている国語辞典のローマ字表記の規準に従う。

²⁾ タイ語における「トゥラギット(*turakit*)」を、本稿では「ビジネス化(*pen turakit*)」と記す。「トゥラギット」という用語は、「ビジネス、事業、商業にかかわる事業、公務とは関わらない重要な事業のこと」[Royal Institute Dictionary 1999: 557]と説明され、近年のタイ社会においては「ビジネス」が適切な訳語であろう。しかし、1970年代以前(モーラム事務所設立以前)、モーラムとは、農民でありながらも門付け芸人として芸能を提供する代わりに、農作物、米、寝床場所などが提供され、東北タイの村落を転々としながら歌を歌ってきた人々である。このことから当時の東北タイのモーラムにとって「ビジネス」、「商業」という用語は親しみがなかった用語であったことは推測できる。

³⁾ 2004年7月下旬、ウボン県の県庁所在地のウボン市内にあるモーラム事務所を訪れ、古老モーラムからの聞き取り調査で得た一次資料、および2004年8月19日～20日の間に主催されたセミナーの記録に基づく。

⁴⁾ 本稿で述べるモーラム・スインの他、東北タイでみら

れるモーラム芸の形態は多様である。モーラム・クローンと呼ばれる男女2人の歌手がケーン(ラオスの笙)の伴奏にのりながら掛け合いで歌を唄っていく形態や、複数の演者が一つの物語を展開していくオペラ劇形式のモーラム・ムー、そして長編物語を歌うモーラム・ルアン・トー・クローンなどである。

⁵⁾ 例えば、モーラム・プーン、モーラム・クローンなど現在では見ることが困難といわれているモーラム芸。この呼び名によって、モーラムの上演形態を区分することができる。

⁶⁾ ラム・スインの上演様式は、従来の伝統的なモーラム芸であるモーラム・クローン(*molam kloan*)は男女2人のモーラム、2名のケーン伴奏者で構成されていた舞台に、ドラム、ベース、キーボードなどの西洋楽器が加わった。キーボードの音が、ケーンの音と似ていることから、以前に比べてケーンの役割は減ってしまった。女性モーラムの衣装は、以前は長丈の伝統的な東北地方の絹織物の巻きスカートだったがミニスカート、ブーツ、ウィッグなどを身にまとい流行するファッションを取り入れることなど特徴的である。

⁷⁾ モーラム事務所は、東北タイの県庁所在地の市内だけでなく市外にもあることがある。ただし、その場合は、あらかじめ住所を把握していないと見つけにくい。

⁸⁾ 個人写真であれば、モーラム・クローンやモーラム・スインの歌手である。グループ写真は、オペラ劇形式のモーラム・ムーなどのモーラム楽団である。

⁹⁾ 2007年調査時、1パーツ=3.82円。

¹⁰⁾ 儀礼用の道具は、13種類ある。それは、蠟燭、線香、花、酒、ゆで卵、バナナの葉、白布、サロン、櫛、白粉、手持ち鏡、潤滑整髪剤、金銭などである。これは、モーラムが用具を一品たりとも忘れないために作成された。

¹¹⁾ 普通のモーラムから「モーラム師」になるためには、どのような素質が必要とされるのだろうか。先行研究によると、モーラム師になるための条件として、①美しい声、②学ぶことに対して常に前向きであること、③記憶力が良い、④頭の回転が早い、⑤機知に富んだ言語表現、⑥観客の興味・関心を常に把握していること、⑦礼儀正しさ、⑧観衆とのコミュニケーションをとる社交力、⑨公演の場の連帯感を保つ協調性などが挙げられている[Worajinda 2005:9]。

¹²⁾ 1940年代にモーラム芸の伝承を経験したウボン県C村で出会った古老モーラムK(2004年調査時、72歳)の話について以下にまとめておく。古老モーラムKによると、当時の伝授方法は、師匠が抑揚をつけて歌う歌詞を必死に書き留めた。そして、古老モーラムKは、自分で書き留めた詩形を見ながら、詩の作り方を学んだ。自宅に戻ってくると、師匠の自宅や僧侶から借りてきた書物を読んで勉強をした。そして自分で詩を作るようになったという。古老モーラムKが覚えている歌を何曲か歌

ってもらった。その内容は、1932年のタイ立憲革命期におけるナショナリズムの高揚を煽る内容やタイとビルマの間で起きた戦争などの歴史に関する内容などであった。

¹³⁾ モーラムP氏によれば、モーラムT以外にも弟子が20名程いるが、彼の弟子のうち「モーラムP」の芸名をもらったのは、数名ほどである。モーラムP氏は、芸名

を与える条件として「モーラムとして見込みがある者」、「モーラムを職としてやり続ける意思のある者」、「家族の理解と協力のある者」、「信頼のおける者」などを挙げている。

¹⁴⁾ OBT (*Ongkanborihan Suan Tambon*) より発行された内部資料に依拠している [OBT 2006 : 2]。

【引用文献】

- Chonphairot, Charunchai. 1983 *Molam - Mokhaen*. Mahasarakham University.
- Compton, Carol J. 1979 *Courting Poetry in Laos: A Textual and Linguistic Analysis*. Northern Illinois Center for Southeast Asian Studies.
- Chanthon, Bunluet. 1988 *Khaen : Dontri phun muang Isan*. Audience Store.
- Keyes, Charles F. 1989 The Thai Economy and Change in Rural and Urban Society. In *Thailand : Buddhist Kingdom as Modern Nation-State*. Chiang Mai : Duang Kamol. 151-177.
- Maphet, Chainathon. 2002 *Phumpanya thang khitasinlapa khong molam pochalatnoy*. Mahasarakham University.
- Miller, Terry E 1985 *Traditional Music of the Lao : Kaen playing and molam singing in Northeast Thailand*. Greenwood Press.
- Ongkanborihan Suan Tambon Lengfaek, King Kutrang, Changwat Mahasarakham. 2006 Rainan kiawkap tambon Lengfaek Kin Kutrang, Changwat Mahasarakham. Mahasarakham : Ongkan Borihan Suwan Tambon Lengfaek, Kin Kutrang, Changwat Mahasarakham.
- Phaengngn, Phaibul. 1991 *Klonlam phumpanya khong Isan*. O.S.Printing House.
- Royal Institute Dictionary. 1999 *Photchananukrom Chabap Rachabanditaya Sathan*. Nanmeebooks.
- Sathanak, Luangpho Sutthisomphong. 1993 *Chiwaprawat lae khlonlam khong molam Sutthisomphong Sathanak*. Pasutthiprachasamakki Temple.
- Smutkhupt, Suriya. 2001 *Khon sing isan : Rangkyakamarom attalak lae siang sathon khong khon thuk nai molam sing isan*. Samnakwicha technology.
- Thammawat, Charuwan. 1993 *Watthanatham phun ban in botbat khong molam to sangkhom isan*. Chulalongkon University.
- _____. 1994 *Ruang botbat khong molam to sangkhom isan nai chuang khung sattawat*. Sathabanwijaisinlapa lae watthanathamisan, Sinakharinwirot University.
- _____. 1997 *Phumpanya molam ek : khwamrunggrot khong adit kap panha khong molam nai patcuban*. Mahasarakham University.
- Worajinda, Wichaya. 2005 『モーラム芸に描かれた「東北タイのラオ人社会」ーチャウイワン師の歌詞分析を通じてー』大阪大学.